

はじめに

## 一 「修行者あひたり」

「修行者あひたり」型表現12／助詞「に」を表していないこと14／「修行者あひたり」型表現とはどのような表現か15／古代・中世日本語の「あふ」18／逢魔・逢霊説19／「相手が借りる」22／意志形と無意志形とを分化させていない動詞「あふ」24／無意志の出会いに用いられた「相手にあふ」25／「修行者あひたり」型表現の衰退27

## 二 「ある」「有」「いる」「居」「おる」「居る」

「昔々おじいさんとおばあさんがありました」30／「をり」の語源31／「おる」と「いる」34／南紀方言・八丈島方言の「ある」36／先行研究38／『竹取物語』の「あり」と「をり」40／「ある」と「いる」「おる」46

## 三 意志動詞「忘る」と無意志動詞「忘る」

有坂秀世氏が考えたこと50／四段活用「忘る」51／四段活用動詞「忘る」の意味56／下

二段活用の「忘る」60／忘れる内容が主格に立つ例——「我が面の忘れむしだは」61／「父の写真」63／大和の歌に見える忘れる内容が主格に立つ例65／『今昔物語集』に忘れる内容が主格に立つ例は存するか68／「忘る」の語源69／「忘れかぬ」「忘れず」その他71／有坂説が成り立つ可能性74／忘れる内容がヲ格に立つ確かな例75

## 四 「前車ノ覆スヲ見テ後車ノ誠ヲ知ル」

吉田澄夫氏の研究78／亀井孝氏の指摘79／『車馬』82／第九二則の原拠85／「覆ル」と「覆ス」89／新古・文体差93／「前車ノ覆ス」の表現価値95／『今昔物語集』の「船俄ニ覆テ」船打返<sub>シテ</sub>死ヌ」99／「前車ノ覆ス」の衰退100

## 五 意志動詞の無意志的用法

意志動詞の無意志的用法104／意志動詞の無意志的用法はいつから見えるか106／意志動詞の無意志的用法の内実108／主語が為手でない場合112／対応する無意志動詞が存するということ115／意志動詞の無意志的用法の成立とその後117／「くしてしまふ」118

## 六 「家の子、郎等多く討たせ、馬の腹射させて、引退く」

強がり表現・負け惜しみ表現から使役表現の随順用法へ122／使役表現の許容用法・随順用

七 「アイマチ」(過)

『史記抄』に見える「アイマチ」134／『史記抄』に見える「アヤマチ」136／『史記抄』の「アイマチ」と「アヤマチ」139／その他の抄物に見える「アイマチ」140／「アイマチノ高名」145／その後の「アイマチ」146／「アヤマツ」と「アヤマル」147／キリシタン資料の「アヤマチ」と「アヤマリ」149

八 意志動詞化・使役・無意志動詞化・受身―「散ラス」「知らセル」「思われル」「降られル」―

他動・使役・自発・受身の接尾語152／奈良時代における「ス」(四段活用)152／奈良時代における「シム」156／奈良時代における「ス」(下二段活用)159／自発・受身の「ユ・ル」160／無意志動詞に付く「ユ」161／意志動詞化・使役・無意志動詞化・受身163／「ス」(四段活用)「ユ」「ル」の成立164／「ス」(四段活用)「ユ」「ル」の接続170／「ラユ」「ラル」の成立と「ル」「ラル」の定着172／使役「ス」(下二段活用)の成立173／平安時代における使役「サス」の成立174／平安時代における肥大化接尾語「カス」の成立176／なぜ「カス」なのか178／平安時代における「シテ」と「セテ」180／室町時代における「シテ」と「セテ」184／現代語の「ス」と「セル」187

九 「はた迷惑の受身」

自発・可能・受身・尊敬190／「はた迷惑の受身」とは191／受身の類別193／「迷惑」195／「はた」196／望ましくないことだけを表す受身は存するか198／「迷惑」意識・「はた迷惑」意識201

おわりに 203

あとがき 205

「相手が借りる」

時代が下がる例であるが、大藏虎明(一五九七―一六四二)が寛永十九年(一六四二)に書き留めた狂言の「引敷婿」という曲に次のような台詞がある。婿入りの挨拶に舅の家へ行くことになった男が、日頃目をかけてくれている人の所に報告に立ち寄る。目をかけてやっている人は、婿入りに行く男が袴の袴を着けていないのに気づいて、それを貸してやろうとするところである。

(教え手)／それならばかみ下の下がたらぬが、その分でゆかうとおもふか(婿)／私は是ばかりでよひとぞんじたが、誠に仰らるればさやうでござる、みまらすれば、こなたのは下がござる、身共のは、物がたらぬやうに御ざる(教え手)／やい／、かみ下があらばおこせひ、ぢや、それはにがつた事じや(教え手)／なふ／あらばやらふとおもふて、たづねたれば、よそへかつていてなひと言ふは。

(現代語訳)教え手)／それなら袴の下が足りないが、その姿で行こうと思っているのか。(婿)／私はこれだけでよいと思っていました。私には何か足りないようです。(教え手、家の者に向かつて)／やい／袴があつたらよこせ、ありや、それは困ったことだ。(教え手)／のう／家に有った

らやろうと思つて、尋ねたところ、他所へ人が借りて行つて無いと言つているよ。

虎明本狂言「引敷婿」(大藏彌太郎) (大藏彌太郎古本能狂言集) (臨川書店)による。

とぞうたは海を舟ももきかたをていさかみしせ  
まはひさのつらぶらぶらたのひねりかた  
まがら ぬくまをうらまをひらきぬ  
よめらまや しまくまをうらまをひらきぬ  
はひらまのやまひらま ぬきま  
けさのやまひらま ぬきま

現代語でならば「よそへ貸して無い」というところであろう。虎明本の書写から一五〇年後の寛政四年(一七九二)に虎寛が書き留めた虎寛本狂言では右の台詞が「みなよ所へかして」(岩波文庫中二四〇頁)となっている。上の「あらばやらふとおもふて、たづねたれば」からの続き具合としては、主格を一貫させて、「よそへ貸して無い」と言うのが自然である。それを、わざわざ相手の方を主格にして、「他所へ人が借りて行つてない」と表現しているのはなぜなのであろうか。「よそへ貸して無い」と言う、意志的に貸したという響きをもつからではないか。この人が意志的に貸そうと思つてよその人に貸したのではなく、恐らく家の者がこの人に相談することなく貸してしまつてい